

自分の「ものの見方・感じ方」をつくる活動 —学習過程「課題設定や取材」の活動の工夫—

東京都世田谷区立松丘小学校 小出 直子

一 はじめに

文章を書くことが苦手な児童の原因には、次のようなことが挙げられる。「書くことがない」「書き方が分からない」「書く目的や意欲を見いだせない」など。

児童が、自分の思いを豊かに表現できるようにするためには、書くことの学習過程「課題設定や取材」において、児童が経験やそこでの自分の思いを分析的にとらえることが大切であると考える。そうすることで、児童は自己と書く対象や事柄を関係付けたり価値付けたりすることができる。

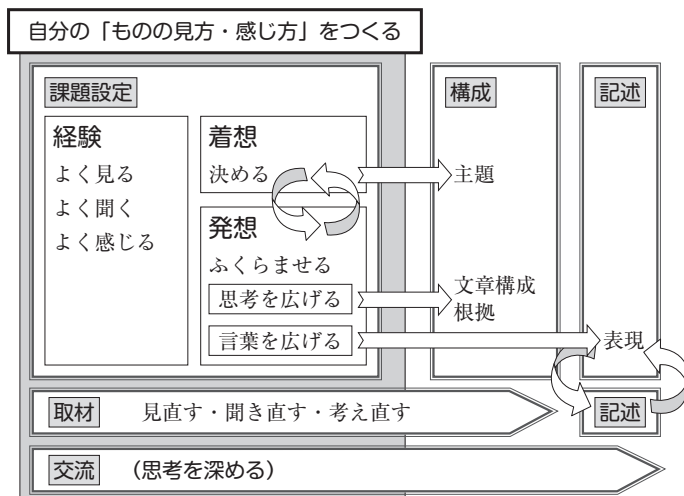
このように、児童が身近なものや事柄と自己とを関係付けたり価値付けたりして考える活動を、「自分の『ものの見方・感じ方』をつくる」ととらえる。書く活動では、自分の「ものの見方・感じ方」をつくることで、個性豊かな作品を生み出すことになり、児童が書く喜びや達成感を味わうことになると考える。

二 「ものの見方・感じ方」をつくる活動

書くことの学習過程「課題設定や取材」を「経験」「発想」「着想」と細分化してとらえる。
(下図を参照)

よく見る・よく聞く・よく感じる「経験」から、自分を見つめ振り返り、思考や言葉を広げる活動を「着想」とする。その中で、自分とのかかわりを決定する活動が「着想」である。そして、これらの活動で常に行われるのが、見直す・聞き直す・考え直す「取材」と、思考を深める「交流」である。こうした「課題設定や取材」の活動を自分の「ものの見方・感じ方」をつくる活動とする。

「発想」で広げた思考は、構成の段階で文章構成や根拠につながり、「着想」で決定した自己との関係付けは、主題につながる。また、「発想」で広げた言葉は、それらを記述する段階で、表現となって現れる。こうした一連の単元の学習活動が、大切だと考える。



三 単元「スポーツ記者になって選手 の頑張りを紹介しよう」(五年)

ここでは、学校行事(運動会)の作文において、自分の「ものの見方・感じ方」をつくる「課題設定や取材」の活動を行った実践を紹介する。

(1) 題材を基にした「経験」

本単元の題材は「運動会」である。児童は一人一人スポーツ記者になり、運動会での自分の頑張りを紹介する記事を書くことを知り、自分が一番頑張った種目について考える。

その際、学級全体やグループで運動会について振り返る「交流」の活動を設定し、より鮮明に振り返ることができるようにする。

※児童Aは、高学年リレーを選択する。

(2) 思考や言葉を広げる「発想」

「経験」で選択した運動会の種目について「頑張った事実」「自分の気持ちの変化」の視点で、さらにその種目について考える。考えた内容は、すべて付せんに記述していく。

また、それぞれの付せんに書かれた内容について、比較(類似・対比)や置換の観点で見直し、それぞれの関係に当たる言葉を考える。その際、辞書を活用し、見つけた言葉は違う色の付せんに記入していく。

※児童Aは、「みんなの思いを抱えて走った」

頑張りを「ちがう世界へ走る」「努力」などの言葉に置き換える。

(3) 自分とのかかわりを決める「着想」

運動会での頑張りと自分とのかかわりを見つめ直し、価値(記事で一番伝えたいこと)を見いだす。それに当たる付せんには、印を付けておく。

※児童Aは、「ちがう自分・ちがう世界へ走る」の付せんを選ぶ。

(4) 「構成」「記述」

「発想」や「着想」で作成した付せんを基に構成メモを作成し、記述していく。

〔児童Aの作品〕

「ちがう世界へ」

世田谷区立松丘小学校の運動会で、ある一人の選手に出会った。それは、高学年リレーの選手一人であるA選手である。

A選手はこう言っていた。

「リレーはちがう自分に走りに行くことであり、ちがう世界に連れて行ってくれる。」と。

この言葉の意味を考えている間に、A選手、入場。緊張していたようだ。(中略)

第一走者が走り出した時、A選手は不安げに第一走者を見つめていた。(中略)

そして、第二走者にバトンがようやく行きわたった。しかし、違うチームに追いつかれてしまった。A選手にバトンが来た時には、もうすぐ違うチームに追い越されそうだった。

A選手が走り出した。A選手はちがう自分に走り行っていた。みんなの思いを抱えて、明るいながらも不安げに走って行った。みんなが保ち続けたい一番を、何とか保っていた。

そして、第四走者にバトンが渡された。A選手は、まだちがう世界に行っていた。いつもはない感じだ。(中略)

リレーはみんなで一つだから、自分は走り終わっても、気持ちはまだ走り続けていること。協力しないと何も始まらないこと。リレー選手も見ている人も気付けただろう。

A選手に伝えたい。「何でも努力し、新しい世界へ」と。

四 おわりに

本単元では、自分の運動会での頑張りに価値を見いだしたことで「作文を書かなくてはいけないから行事は嫌だ」と言っていた児童も、意欲的に文章を書くことができた。

また、書くことの学習過程において、交流活動を常に行なったことで、自分の「ものの見方・感じ方」を深めながら学習を進めることができた。今後も、児童の「ものの見方・感じ方」をつくる力を伸ばし、書くことが好きな児童を育てていきたい。

こいで なおこ 世田谷区立松丘小学校主任教諭。